

【やまきわ美術館 第2回展覧会開催のお知らせ】

2014年夏にオープンした「やまきわ美術館」は、松之山の上蝦池集落にある古民家を舞台とする現代美術ギャラリーです。

7月18日から9月27日まで、グループ展「やまのは」を開催いたします。出展するのは、東京・群馬などを拠点に活動する3人の若手作家です。第2回を迎える本展では、各作家が屋外を含む複数の場所に作品を展開し、相互の響き合いに耳をすませることをテーマに据えています。

季節の移ろいのなか、真摯に、丁寧に育んできた本展は、訪れる人の道ゆきに寄り添いながら、その経験に豊かな彩を添えることと思います。ぜひ一度、足をお運びください。

開催概要

展覧会タイトル	「やまのは」
会期	2015年7月18日(土)－9月27日(日)
出展作家	井口香奈子／外丸治／福島ゆり
開館時間	10:00－17:00 火曜・水曜休館（お盆中は開館予定）
入場料	無料
会場	やまきわ美術館 新潟県十日町市松之山上蝦池350
連絡先	025-594-7667 info@yamakiwagallery.com
HP	www.yamakiwagallery.com
代表	福島ゆり
企画協力	兼松芽永 滝朝子

展覧会の背景と詳細

昨年の会期後より、出展作家は話し合いを重ね、「やまきわ美術館」という場において、いかなる展示や作品展開の可能性があるのか、摸索してきました。谷にかかる橋を渡り、大きく歪曲するトンネルをくぐり抜けた先に在る、山あいの集落「上蝦池」。美術館を囲む小さな庭は、隣接する畑や田んぼ・家々の庭・折り重なる山々へと、ゆるやかに結びつきながら広がっています。

こうした、閉じながらもゆったり広がりゆく土地の息づかいを活かし、本展では、一人の作家が複数の場所にて制作を行い、場や作品相互の響き合いに耳をすませることをテーマに据えました。築90年を数える本館のような古民家は、冠婚葬祭時には襖を外し、広間として人が集う場ともなってきました。複数の場に作品を展開することは、折り重なる暮らしの時空に、新たな読点を打つことでもあります。本展に寄せる作家の言葉は、次のとおりです。

庭を渡る日 外丸治

柿の木に立て掛けられた雪囲いの丸太は、深い雪から庭木を守るために使われていた。
育ち続ける庭は野生を手の中に、密になる場所。
家の内部に支えるものがなくなった不安定な雪囲いの塔を板を張り合わせた空虚な梁が支え、
祈りの場と多様な野生を愛でる欲求とが拮抗して立つ。
その先にある仏間は、境を越えて交感する舞台となる。

漂流者／鳥のいない場所 福島ゆり

システムとその中で活動する要素、その関係に興味がある。
システムは私たちの内側／外側にある。
その形は時として捉えがたい。
そして暴力的である。

今回の作品は、システムのもたらす暴力が主題である。
それは境界を、結びつきを、どのように変えるのか、
そのとき、心の奥の奇妙な場所には何が見えるのか？

Yours sincerely 井口香奈子

静まり返っていた旅支度を
かたくなな左手でほどく

国境を忘れた言葉でかかれた錆びれた臨書
中空の皺
魂のほほえみの細

親しみと逡巡が布置された空のした

一瞬一瞬に眼耳をそばだてる
緊張と感嘆がちぐはぐに舞っている

その姿は 到着なのでしょう 出発なのでしょう

わずかな しかし至極の祈りをこめて

ではまた、そのうちに。



外丸治 ‘庭を渡る日’



福島ゆり ‘鳥のいない場所’



井口香奈子 ‘Yours Sincerely’

展覧会のタイトル「やまのは(山の端)」は、山が空に接する場所を指し、空が山に接する「やまきわ(やまぎは)」と対をなして、ひとつの稜線を描き出します。また「端」は、家屋の軒や縁側など、ウチとソトの境界領域や、はじまりを意味します。

いわゆるホワイトキューブ以外の場所で展開されるインスタレーションは、豊かな表情をみせる生活空間や場(=星空)において、ひとつの図(=星座)をひき結ぶことで、作品として存立するとみなされます。しかし一方では、図地を切り分けていた枠組みや、それを成立させる自身の身体感覚そのものを揺らがせる契機を秘めているといえるのではないのでしょうか。

外丸治は、庭の柿の木に立てかけられた雪囲いの丸太から、神棚のある座敷・仏間へと、作品を展開させました。雪に耐え実りを結ぶ柿の木、神棚の煤けた社、梁や面。木の自然(じねん)に向き合う作品空間は、土地に抱かれる日々の祈りと、代々の主の重ねた営みの歳月へと、訪れる人を誘うことでしょう。

幼少期から、様々な土地を巡りながら歳を重ねた福島ゆりは、抗いがたい「システム」の存在とその暴力性をテーマに、中二階と屋外(美術館向かい)で作品を制作しました。豪雪や度重なる地震に見舞われたこの地のみならず、とりまく環境は、世界の至るところで時に牙を剥き出します。加速する情報化やテクノロジー発展の波打ち際で、なおも物理法則や制度・慣習にふるまいを縛られ続ける現実、対峙する機会を失っているのかもしれない。

美術館の立ち上げから、たびたびこの地を訪れてきた井口香奈子は、その旅路の来し方ゆく末に想いをはせます。たずねた場所の鮮烈な体験は、家路を辿り、時を経るにつれ、やわらかく幾重にも響きあう記憶として、少しずつかたちを変えてゆきます。巡り鼓動する記憶のかげらの手触りは、訪れる人の深くと結びつきながら、新たな旅立ちを織りあげることでしょう。

三人三様の「やまのは」は、やってくる人の身体や刻まれた記憶・道のりの数だけ、とりまく集落や広がりゆく山々との間に、様々な稜線を描き出していくことと思います。

ぜひ一度、足をお運びください。

やまきわ美術館「やまのは展」実行委員会
井口香奈子 外丸治 福島ゆり 兼松芽永